



王子さまの価値観って

渋谷本町学園中学校 七年A組 取次亜未加

まず、私がこの作品を読んで思ったことは登場人物たちの発言について、深い意味がこめられているものが多いということだ。例えばこういうものだ。

「ねえ……悲しくてたまらないときは、夕陽が見たくなるよね……」

この言葉は王子さまがぼそつと言ったものだが、私には、王子さまの深い想いがこめられているように思えた。もしかしたら、王子さまは昔悲しくてたまらないことがあったとき夕陽を見て、その悲しみを忘れようとしたのかもしれない。もしかしたら、あまり意味はこめられていないかもしれない。と、色んなことが考えられる。王子さまは何を考えていたのか、また、どんなことを思っていたのかなどに着目して読むと、またおもしろくなってくる。

この作品は、大人と子供について、とても大切に書かれている。最初、筆者が子供のころ、「大蛇ボアに飲まれたゾウ」の絵を描いて、大人に見せたところ、帽子と間違えられた。さらには、

「それよりもっと地理や歴史や、算数や文法をやりなさい。」

と、言われてしまったのだ。私も言われた事があるので、気持ちがよく分かる。それに比べて、この絵を大人になった筆者が、当時子供だった王子さまに見せたところ、あっさり分かってしまったのだ。この作品には、そんな場面が数多くある。王子さまと知り合って五日目、花のトゲは

なんのためにあるのかしつこく聞かれて、「大事なこと」という上手い口実を使つてその場から逃げようとした筆者が、一瞬、大人になつてしまつた。大事なことがあつて、手が離せないとか、今まで、自分は子供のような純粋な心をもっていたはずだったのに、気づかぬ間に、自分も大人になつていたのだと、この時、筆者は思ったことだろう。

このような、大人と子供の価値観の違いについて書かれたものはたくさんある。例えばジブリ作品の「となりのトトロ」。トトロは子供には見えて大人には見えないものである。だからこそ、私は、幼い時の大切な価値観を忘れないでいたい。そういった意味では、サンタクロースも同じだと思う。クリスマスイブの夜によいこのみんなにプレゼントを配るおじいさんなのだが、信じていないと来てくれない。大人の人はそんな人いないと思つているから、プレゼントをもらえないのだと思うし、子供は信じているから、プレゼントをもらえるのだと思う。ここにも大人と子供の価値観の違いが表れているのだと思う。この作品では、そういうことを大人にも子供にも分かりやすく説明しているのではないかと私は思う。絵を見たときの反応や、自分の発言への責任などが、その象徴である。

小さい子と遊んでいると最近よく思うのがよくわからない絵をよく描くということだ。ぐるぐるとかぐちゃぐちゃとか小さい子たちには分かるものでも大人には分からないだろう。実際、私にも分からない。私もあのときの筆者のように、この時大人になつたことを思い知らされたのだ。このことを、本を読んで思い出した。

王子さまが筆者と出会って、王子さまは何を伝えようとしていたのだろうか。もちろん何も伝えようとはしていなかったかもしれない。けれど、筆者は王子さまと出会ってから気持ちや大人と子供の価値観について変わった所がある。最初のころ、筆者は「大事なこと」と言ってもただ自分は他の大人とは違っているんだ、と、少なくとも小さな「思いこみ」をしていた。でも、王子さまと出会ったことで、筆者は完全に他の大人とは違う人になれたのだ。それを考えると王子さまの言葉や行動は、何らかの意思をもって、筆者の心をつき動かしたのではないかと思ったのだ。王子さまと筆者が出会ったのをただの偶然と言うべきか奇跡的と言えるのか。私は奇跡だと思う。王子さまと出会ったことで筆者は真の「分かる」大人になれたし、筆者と出会ったことで、王子さまは変な大人だけではないと知ることができたのだから、私は、王子さまと筆者の出会いを奇跡と言ってもいいと思ったのだ。

子供にしか分からないことというのは、大人にとってはバカげたことかもしれない。でも少なくとも大人になりかけの私は、この作品を読んで、ただのバカげたことではないのかもしれないと思えたのだ。だからこそ私は今しかない私だけの価値観を大切にしていきたいと今は思える。